

## スウィフトの生涯 (VI)

「市内夕立の景」寄稿から「(スペイン継承戦争における)  
同盟国の措置」執筆まで (1710 ~ 1711)

三 浦 謙

一七一〇年スウィフトはアディソンやスティールと頻繁に会い、「タトラー」に二番目の詩「市内夕立の景」<sup>(1)</sup> を寄稿している。

### A Description of a City Shower

Careful Observers may foretel the Hour  
 (By sure Prognosticks) when to dread a Show'r:  
 While Rain depends, the pensive Cat gives o'er  
 Her Frolicks, and pursues her Tail no more.  
 Returning Home at Night, you'll find the Sink  
 Strike your offended Sense with double Stink.  
 If you be wise, then go not far to Dine,  
 You'll spend in Coach-hire more than save in Wine.  
 A coming Show'r your shooting Corns presage,  
 Old Aches throb, your hollow Tooth will rage.  
 Sauntering in Coffee-house is Dulman seen;  
 He damns the Climate, and complains of Spleen.

(1—12)

### 市内夕立の景

よく気をつけていれば（確かな兆しがあるから）  
 夕立がやってくる時刻は予告できよう。

雨が降りそうになると、猫は物思わしげになり  
じゃれるのを止めて、自分のしっぽを追い廻さなくなる。  
夜、帰宅すると  
下水の悪臭が倍加してムカムカする。  
賢明ならば、夕食に遠出はしないことだ、  
ワインで節約しても、それを上廻る金を貸馬車で使う羽目になるから。  
夕立の到来は足の魚の目が激しく痛む予告になる、  
古い傷がうずき、中空の歯の痛みがたまらなくなる。  
手持ちぶさたの客がコーヒーハウスの中を歩き廻っている、  
彼は天気に悪態をつき、重苦しい気分をかこつ。

こうして、大降りになると市内には濁流が渦巻いて駕籠椅子におさまった優男も身動きがとれなくなる。夕立に見舞われた当時のロンドンがいかに不潔であったか、つぎの一節をみてもわかる。

Filth of all Hues and Odours seem to tell  
What Street they sail'd from, by their Sight and Smell.  
They, as each Torrent drives, with rapid Force  
From Smithfield, or St. Pulchre's shape their Course,  
And in huge Confluent join at Snow-Hill Ridge,  
Fall from the Conduit prone to Holborn-Bridge.  
Sweepings from Butchers Stalls, Dung, Guts, and Blood,  
Drown'd Puppies, stinking Sprats, all drench'd in Mud,  
Dead Cats and Turnip-Tops come tumbling down the Flood.

(55—63)

雑多な汚物も、その色と臭いで、  
どの通りのものかがわかる。  
土砂降りになると、汚物は、はげしい勢いで  
スミスフィールドやセント・パルクルス通りから流れだし、  
スノウヒル・リッジで合流すると、  
暗渠を伝わってホルボーン橋まで下ってゆく。

肉屋の店先から掃きだされたゴミ、糞、<sup>はらわた</sup>内臓、血液、  
溺れ死んだ小犬、異臭をはなっている小魚、すべて泥まみれ。  
死んだ猫とカブの葉っぱが大水の中をころがって流れている。

英語で「大雨になる」ことを rain cats and dogs という。OED は、この慣用句の最も古い用例として、I know Sir John will go, though he was sure it would rain cats and dogs. を挙げている。この一文は、スウィフトが 1738 年に書いた「洗練された会話」<sup>(2)</sup> の第 2 篇で、スパークリッシュ卿<sup>(3)</sup>なる登場人物が口にするセリフである。

スウィフトが「市内夕立の景」で、ロンドンがはげしい夕立に見舞われた時、犬や猫の死体が濁流に流されてゆくさまを描き、「洗練された会話」で rain cats and dogs といいうゝまわしを登場人物に使わせているのはおもしろい。

OED はスウィフトより以前の用例を挙げていないが、辞書編集家でスウィフトの「洗練された会話」に細密な注解を施しているエリック・パトリッジ<sup>(4)</sup>によると、rain cats and dogs は 1600 年頃から使われだしたらしい。スウィフトが始めて用いたいいまわしではないようである。

ところで、この「市内夕立の景」はイングランドでは好評で、ラウ<sup>(5)</sup>やプライマー<sup>(6)</sup>は、この種の詩では他に較ぶべきものがないといって絶讃した。ところが、ダブリンでは余り問題にされず、アッシュ司教<sup>(7)</sup>は、前年の作である「朝の場景」のほうをよしとした。こういった評価の違いに途惑いを感じたが、スウィフト自身は「市内夕立の景」のほうが気に入っていた。

一七一〇年には、この外、「箒についての瞑想」<sup>(8)</sup> が出版されている。これは短いパロディだが、スウィフトの当時の人間観を知る好個の材料なので、まず、こゝにその全文を掲げる。

### 箒についての瞑想

ロバート・ボイル卿<sup>(9)</sup>の瞑想の流儀にならって

不名誉にも、片隅に置きざりにされているこの一本の箒は、かって

は森で生き生きと育ち、樹液が豊富で枝葉をたくさんつけていた。ところが、今となっては樹液の出なくなった軀幹に、枯れた小枝の束を結びつけて自然と拮抗しようとする厚顔な人間の徒いたずらな技！ 目下のところは、ごくひいきめにいっても、かつての姿の逆で、枝が地に向き根が宙に浮いている逆立ちした木だ。今では、薄汚れたどの女中にも使われて否応なしに彼女の苦役を仰せつかり、気まぐれな運命のいたずらで、他の物をきれいにしながら、自身は汚される破目になっている。挙句のはては、女中に奉仕して切株同然にすりへらされると、戸外に投げだされるか、もしくは最後のお役にと暖爐の火付け用にされるのが精々である。これを見た時、私は溜息について、「まさしく人間は籌だ！」と呟いた。自然の手でこの世に送りだされた時、人間は力強く潑瀝と生育して頭には自身の毛髪——樹木を理性をもつ人間とすれば、その枝にあたる——をつけているが、結局は不節制の斧が緑の枝を断ち切り、人間を未枯れた樹幹にひとしくする。そこで、人間は人工の技にうったえて、カツラをつけて、自身の頭に生えたのではない人工の髪（粉を一面にふりまいている）を鼻にかけている。だが、もしこの筹が、これまで樺の木がうけたことのない損傷を自慢気に、埃まみれの姿で、あえてこの場に立ち現れるならば、いかにこの上ない美女の寝室の清掃に使われたにしろ、われわれはその虚栄を愚弄することになろう。われわれが自身の美点に甘く他人の欠陥に手厳しいとは、なんと偏向した審判官であることか！

筹は逆立ちしている木のシムボルといえよう。とすると、人間は動物的資質をいつも理性的資質の上にのせ、踵があるべきところに頭を据えて、地上を這い廻っている逆さまの生き物でなくて何なのだろうか。しかも、人間は欠点だらけでありながら、自らは普遍的な改革者をもって任じ、悪幣を是正し、不平を取り除き、自然の隅々にわけ入って隠された腐敗を明るみにだすといっては、かつてない埃を地上にたてている。その間、汚染と変らぬ所業をしながら、掃き清めているのだという。そして、晩年は女性への隸従で過し、切株同然にすり

へって役立たずとなると、兄弟分の庭簾のように他人様が暖をとるための薪にされるのが落ちである。

このパロディそのものは一七〇四年に書かれたらしい。スウィフトは当時ロンドン訪問のさい、しばしばバークレー邸に滞在して、バークレー家のチャップレインとしての役目を務めるかたわら、好んでレイディ・バークレーの話し相手となつた。レイディ・バークレーはロバート・ボイルの『瞑想録』<sup>(10)</sup>を好み、あるときスウィフトに読んできかせるようせがんだ。<sup>くだん</sup>件の本を好まなかつたスウィフトは一計を案じ、ボイルのスタイルを真似てモノした一文を本にさしはさんで読み上げ、読み終えると、なにくわぬ顔で本を書架にもどした。この一文が「ロバート・ボイルの『瞑想録』のスタイルに倣って」という添書のついた「簾についての瞑想」である。レイディ・バークレーは奇矯なタイトルに驚きながらも興味深くきいた。後で、スウィフトの仕業とわかると、彼女は一座のものと笑つて、その機智を讃えた。

ところで、一七一〇年から一七一四年のアン女王治世最後の四年間はスウィフトが政治的に最も華々しい活動を示した時期である。一七一〇年九月、スウィフトがロンドンを訪れた最大の目的は、アイルランド国教会の指令にもとづき先年拒否された初穂税の撤回を更めて交渉することにあつた。スウィフトは早速ゴドルフィンに会つたが、ゴドルフィンの応待は冷やかだった。キング大司教宛の当時の書簡で、スウィフトはこれまでいろいろな要人に会つたが、これほどそっけなくあしらわれたことはないといつている。ゴドルフィンはその折り、六十五歳で、兄の死でその遺産をひきつぎ年約四千ポンドの土地収入があつたが、アン女王からは宰相の座をひくようにという通達をスウィフトに会う一ヶ月前に受けていた。スペイン継承戦争は長びくばかりで戦況は思わしくなく、税金は高くなるばかりで、国民の政府批判は手厳しく、アン女王はゴドルフィンの施政にサジを投げていた。こうして、スウィフトは折悪しく、ゴドルフィンの失意の時期に出くわしたのである。ゴドルフィンの支持者がスウィフトに事情を

説明したが、屈辱感を拭いきれないスウィフトは戯詩「魔法使いシド・ハメットの鞭」<sup>(11)</sup>を書いてゴドルフィンに一矢を報いた。シドはゴドルフィンのクリスチャン・ネームであるシドニーの短縮形。ハメットはスウィフトが親しんでいた『ドンキホーテ』続篇の冒頭に出てくる人物名<sup>(12)</sup>からとっている。鞭はゴドルフィンの大蔵卿としての官杖である。この中で、スウィフトは次のようにゴドルフィンを揶揄している。

Dear Sid, then why wer't thou so mad  
To break thy Rod like naughty Lad?  
You should have kiss'd it in your Distress,  
And then return'd it to your Mistress,  
Or made it a Newmarket Switch,  
And not a Rod for thy own Breech.

(79—84)

シド殿、それではどうして悪餓鬼のように  
怒り狂って、鞭を折られたのか。  
苦しい時には、鞭にキスをなさって  
女主人にお返しすべきだった、  
もしくは、ニューマーケットの競馬用の鞭にされるべきで、  
尻拭き用の棒にすべきではなかったのだ。

ゴドルフィンは一七一〇年八月八日、女王から罷免されると、大蔵卿としての官杖を折って暖炉にくべた。「怒り狂って鞭を折った」というのはこのことを指している。また、ニューマーケットはイングランド東部サフォーク州にあって競馬で名高い。官杖をニューマーケットの競馬用の鞭にすべきだったというのは競馬狂であったゴドルフィンへの揶揄である。

ところで、初穂税撤回の交渉であるが、ゴドルフィンに見切りをつけたスウィフトは、一七一〇年十月の総選挙で大勝したトーリー党の領袖ロバート・ハーリーの説得に当るのが得策と考えた。スウィフトはゴドルフィンと面談して間もなく一七一〇年十月の初旬にはハーリーと初めて会

談し、翌十一月には、トーリー党の機関紙「エグザミナー」の編集および執筆を引受けている。スウィフトの尽力を多としたハーリーは早速アン女王との交渉に臨んだ。ハーリーは二週間の中に四度女王と会い、アイルランドでの初穂税免除を実現すべく努力した。ハーリーは、このためスウィフトを女王に謁見させることまで考えたが、これは結局実現されずに終った。その後幾多の曲折を経て、初穂税免除は一七一一年二月十七日、オーモンド侯<sup>(13)</sup>がアイルランド総督に着任した四ヶ月後、ようやく正式に認可された。これで、スウィフトがアイルランド教会から仰せつかっていた大きな任務はようやく果せたのである。だが、アイルランド国教会の聖職議会もアイルランドの上院も、認可にさいして、女王とオックスフォード伯ハーリーそれにアイルランド総督となって間もないオーモンド侯に謝意を表わすばかりで、スウィフトの労に報いようとはしなかった。

ところで、スウィフトと「エグザミナー」との関りあいは一七一〇年十一月上旬から一七一一年六月中旬までの八ヶ月間（14号から45号まで）である。「エグザミナー」は匿名の週刊紙で、一回分約2,000語、活字のミスはほとんどなかった。匿名は、人身攻撃まがいのやりとりが多かった当時の新聞では普通のこと、隠密行動を好んだハーリーの趣味にかなっていた上に、ホイッグの有力者を揶揄嘲弄しようとしたスウィフトにもうつつけだった。スウィフトは執筆にあたって二つの点に留意している。一つはホイッグの施策がいかに誤まっていたかを力説すること、もう一つは、ホイッグの個々の指導者とくにウォルトン卿とかマールボロー侯とかを槍玉に上げることだった。まず、第一の点だが、執筆開始して間もない15号で「政治家の嘘」をテーマにスウィフトは次のようにボヤイテいる。「政治家は、たとえていえば、生まれながら毒牙をそなえた妖怪で、生まれた時に毒牙がなければその妖怪は死産であり、生後元気にとび廻っていても、毒牙をなくせばそのいのちは絶える。この妖怪の力は生まれた時から絶大で大仕事をやってのける。戦わずに一国を征服したり、いったん人にあたえた職をとり返したり、聖者を無神論者にしたり、愛国者を道楽者に仕立てたりする。こうした妖怪が20年間政権の座にあった党（ホイッグ）

の守護神であった。イングランドは、これまで、彼らトイッガに翻弄されたために、風儀は乱れ、富は枯渇し、教会と国家は壊滅しかけている。それなのに相も變らず、嘘が飛びまわり、眞実がビックひきひきその後を追っているのが実情で、悪質な文筆業者に読者が不思議とつくように、嘘つきに信者が絶えないのは歎かわしいかぎりだ」と。

「エグザミナー」21号では、トイッガが口では宗教寛容を唱えながら、国教会をないがしろにしてきたことを手厳しく非難している。「彼らは懷疑派や非国教徒に備えて国教会が築いてきた防壁をいつなんどきでも壊しかねない。彼らは国教会を貧しいといっては嘲い、富んでいるといっては憎悪し、貧慾だといっては非難してきた。だが、最も許し難いのは20年間血税をしづりとり、堪えがたい重荷を負わせて国民を苦しめてきたことである。戦争の続行によって利益をえているのは株式投機家だけである」ときめつけている。事実スペイン継承戦争での勇者も、かっての祝勝者も、長びく戦争に猜疑の目を向けだしていた。それに一七〇九年と一七一〇年の不作続きで、小麥の値段は倍になり、土地への課税は際限がなかった。志願兵は少なくなり、常備軍の将来は危ぶまれていたのである。

同じく、「エグザミナー」21号では、トイッガの商人根性を指摘して、トイッガはニシンの保存とニクズク（香味料）の輸入が政治だと考えているといって嘲笑している。

個々のトイッガの指導者を槍玉に上げる点で、最も手厳しい攻撃を受けているのはナポレオンと比肩される十八世紀の武将マールボロー侯である。スウィフトは、「エグザミナー」28号で、マールボローを、シーザーおよびポムペイと共に第一回三頭政治を行ったマルクス・クラッスス<sup>(14)</sup>になぞらえ、次のようにいっている。「あなたは品位があり、明晰な頭脳をもち、弁舌さわやかで、怒りを抑える術も心得ている。武将としても多大の戦果を上げ、メソポタミア最強の諸都市をも屈服せしめた。だが、このような優れた美質と輝かしい功績にもかかわらず、あなたは国内では貴族にも平民にも愛されていないし、国外では、自軍の上官にも兵卒にも愛されていない。クラッスス、それはなぜか。省りみれば、あなた自身容易に気

づくはずだ。あなたがローマ帝国随一の富者だからだ。あなたには嫡男がないが、あなたの息女はすべて裕福な貴族に嫁いでいる。そして、あなたは晩年にもかかわらず、その物欲は止まるところがない。あなたの敵も、貧慾なあなたを嫌い、数々の武勳はすべて、あなたの勇敢な士官や兵卒の賜物にしている」これは書簡の形での、かなりあからさまな忠言である。

一七一年にスウィフトが書いた「同盟国の措置」<sup>(15)</sup>では、「マールボローの最良の友人すら、貧慾をその性癖のもっとも顕著な点とみなしている」といっている。「エグザミナー」や「同盟国の措置」でのスウィフトの筆誅がマールボロー罷免の少なからざる導因になったとされているが、スウィフトは『ステラへの手紙』<sup>(16)</sup>で、スウィフトのマールボロー非難は苛酷ではないといっている。

「エグザミナー」で、とりわけ槍玉に上げられたもう一人はウォルトン卿<sup>(17)</sup>である。トマス・ウォルトンは一七〇八年から一七一〇年迄アイルランド総督を勤めた。二年間の在任中に、彼は45,000ポンドを手中にしたが、この中、正規のルートによる収入は、まずその半分であるといわれた。好色な精力家で、63歳の大厄年を過ぎても25歳の青年の若さがあった。その上、無神論者で、教会の礼拝堂の前で瀆神のことばを平気で口にした<sup>(18)</sup>。このトマス・ウォルトンをスウィフトは「エグザミナー」18号で、ローマの市民権を無視して、不当な課税を強いては私腹を肥やし、陰では略奪を擅っていたシシリーの治安官ガイウス・ヴェルレーズ<sup>(19)</sup>に擬して攻撃している。彼は司法の座で、5回キケロに弾劾され、最後はマーク・アントニーによって処刑されるが、スウィフトはキケロの5回の演説を500語の弾劾文に要約し、ウォルトンに外ならぬヴェルレーズの非法を明るみにさらけだしている。

このようにして、スウィフトが執筆しだしてから、「エグザミナー」はイギリス全土に拡がっていった。スウィフト自身、一日に50回も「エグザミナー」という紙名を耳にしたことがあるといっている。ホイッグはたまらず、アディソンに「ホイッグ・エグザミナー」を編集させて、これに対抗したが、「ホイッグ・エグザミナー」は5週間続いただけで盛り上らず短命

に終った。「エグザミナー」は一七一〇年八月三日に第1号が出てから一七一年七月二十六日まで継続し、一時中断したが、一七一一年十二月六日に再刊されて一七一四年七月二十六日まで続きアン女王の死後まもなく廃刊になった。このように、長く続いたのはスウィフトの力量によるところが大きい。「エグザミナー」はたしかにトーリーの機関紙だが、スウィフトは、たんにトーリー党のプロパガンディストたることに甘んじることはなかった。「エグザミナー」執筆の最終の線はスウィフト自身が決めたのである。だからこそ、スウィフトの執筆後「エグザミナー」の紙面は一変し、イギリス全土で、国民の声として読まれるようになったのだろう。

トーリー党のジャーナリストとしてのスウィフトの活動は「エグザミナー」執筆に止まらなかった。スウィフトは次の四つの論考で、現にトーリー内閣がとっている政策が、あらゆる点で必要であり、かつ望ましいことを国民に懇えた。

- |                                       |            |
|---------------------------------------|------------|
| (1) 「同盟国の措置」 <sup>(21)</sup>          | (一七一一年十一月) |
| (2) 「十月クラブへの助言」 <sup>(22)</sup>       | (一七一二年一月)  |
| (3) 「ホイッグ党領袖への書簡」 <sup>(23)</sup>     | (一七一二年六月)  |
| (4) 「アン女王治世最後の四ヶ年の経緯」 <sup>(24)</sup> | (一七一二／三年)  |

最初の論考は「スペイン継承戦争の勃発およびその遂行にさいして、同盟国ならびに前内閣がとった措置」というのが正式の標題で、一般には上記のように略称されている。これはボーリンブルックの発案で、ボーリンブルックはウインザー滞在中、スウィフトと深夜まで何度も本件につき談合を重ねた。慎重な検討の末スウィフトが書き上げたのは一七一一年十一月二十四日で十一月二十七日国会の開期中に発刊になった。スウィフトは、このパンフレットで、国民の信託を受けて国政の掌に当ってきた者たちがどのような政治をこれまで行ってきたかを国民に知らしめようとした。そのさい、問題はホイッグの指導者が敵方が決して承服できないことが明らかな条項を突きつけて、平和締結の擬態を演じてきた点である。そのため、10年戦争を継続し華々しい戦果を挙げてきているにもかかわらず

ず、望ましい平和が実現できていない。そこで、スウィフトは、発表ずみの輝かしい勝利が果して事実なのかという疑問までここで提出している。したがって、この論考の主旨は、現状を更めて検討し、このような事態が続ければ、いかなる災厄を招くかを国民一般に認識させることにあった。「イングランドはこれまで 10 年戦ってきた。もう 5 年続ければ、イングランドは完全に破滅する。われわれは、せいぜい脇役であるべきさいに主役の勤めを果してきた。戦うべきでない時に戦ってきた。同盟国がわれわれとの誓約を踏みにじるのをそのまま見過してきた。<sup>(25)</sup> われわれは国家を抵当にして戦い、今日では 5,000 万ポンドの負債を抱えている。われわれはいくつもの都市を占拠した。だが、一つ一つの都市を占拠するのに 600 万ポンドの金を使ってきたのだ。それなのに同盟国に利するばかりで、イングランドのためにはなっていない。われわれは勝利をかちえてきた。だが、その勝利はわれわれに不毛の栄誉を与えるばかりである」スウィフトは、このように国民に強く訴えた。このパンフレットは国民の間にたいへんな反響をよんだ。一週間で 4 版を重ねて、しばしば一般庶民の話題になったばかりか、国会での討論のさいにも、このパンフレットの文句がしきりに引用された。スウィフトは 1711 年 11 月 30 日のステラへの手紙で、「このパンフレットは世間を騒がせています。いい薬になるでしょう」<sup>(26)</sup> と得意気に語っている。

### 注

- (1) 1710 年 10 月 17 日「タトラー」の 238 号に掲載された。
- (2) *A Complete Collection of Genteel and Ingenious Conversation in Several Dialogues.*
- (3) Lord Sparkish.
- (4) Eric Honeywood Partridge (1894—1979). イギリスの文芸批評家、辞書編集者。  
*Eighteenth Century English Romantic Poetry. A Dictionary of Slang and Unconventional English.*  
ニュージーランド生まれで、第一次世界大戦に従軍した。
- (5) Nicholas Rowe (1674—1718).

詩人、劇作家。

- (6) Matthew Prior (1664—1721).

詩人、外交官。

- (7) St. George Ashe (C. 1658—1718).

Cloyne, Clogher, Derry の司教を歴任。Trinity College 時代、スウィフトの指導教官であった。

- (8) *A Meditation upon a Broomstick.*

1703年頃書かれて、1710年に出版された。

- (9) Robert Boyle (1627—1691).

自然哲学者、化学者。Bacon と比肩された。

- (10) *Occasional Reflections upon Several Subjects with a Discourse Touching Occasional Meditations* (1665).

- (11) *The Virtues of Sid Hamet the Magician's Rod* (1710).

- (12) 『続篇ドンキ・ホーテ』でドンキ・ホーテの三番目の遍歴の執筆者になっているアラビアの史家シーデ・ハメーテ・ベネンヘーリ。

- (13) James Butler, 2nd Duke of Ormonde (1665—1745).

- (14) Marcus Licinius Crassus (115?—53 B. C.) ローマの将軍、政治家。

- (15) *The Conduct of the Allies.* 後述。

- (16) *The Journal to Stella* はスウィフトがエスター・ジョンソンとレベッカ・ディングレー宛に1710年9月から1713年6月にかけて日記の形で送った65通の書簡である。この手紙はエスター・ジョンソンが保存していたが、彼女の死後スウィフトの手に渡った。1738年、この中の最初の40通がスウィフト家の家政を執りしきっていたホワイトウェー夫人に預けられた。ホワイトウェー夫人は、この書簡の入った包みをスウィフトの死後ほぼ10年を経過するまで、約17年間、開封しなかった。残る25通はホワイトウェー夫人の手に渡らず、心身が麻痺状態にあったスウィフトの最晩年にスウィフトの世話をしていた牧師ライアン師がスウィフトの死後たまたま見つけたことになっている。

*The Journal to Stella* というタイトルは、トマス・シェリダンが1748年自ら編集したスウィフトの著作集で初めて用いた。それに、この特異な書簡集中で、ステラという愛称は使われていない。スウィフトが初めてこの愛称を用いたのは、1719年3月、エスター・ジョンソンの誕生を讃える祝詩の中である。以後1727年まで続くエスター・ジョンソン誕生の祝詩や、トマス・シェリダンのような親しい友人への書簡の中で、スウィフトはステラという愛称を用いている。

スウィフトは、夜帰宅してから薄い青インキで二つ折り判の用紙に、できるかぎり細かい字でこの書簡を書き綴った。1710年9月9日ロンドン発信の書簡の中で次のようにいっている。「これから、あなた方に一種の日記の形で毎日な

にかを書くことにします。用紙がうまったら、あなた方のほうから便りがあろうとなかろうと、お手元にお送りすることにします。かなりの分量になるでしょうが、私はいつもあなた方とお喋りしているつもりで書くことにします。」スウィフトには、もともとこの書簡集を出版する意図はなかった。

それに、この書簡集で目立つのは政治があまり話題になっていない点である。スウィフトが、ここで政治をとりたてて話題にしなかった理由として、レスリー・スティーヴンは二つの点を挙げている。一つは、政治は受取人が関心を示す話題ではなかったこと。もう一つは、郵便局員を恐れていたことである。郵便局員は当時しばしばスパイとして利用された。したがって、この書簡中の大官との往来はさしさわりのないことを述べるに止まっている。ハーリーとかセント・ジョンといった当時の政界の大立物の実像は、この日記体の書簡集からはうかがえない。

では、この書簡集の興味はどこにあるのか。それは、ステラやレベッカを相手にしてのお喋りを通して私たちが知ることのできるスウィフトの希望や懸念である。スウィフトはこれを無意識に示している。たとえば、こんな風に書いている。

1710年9月9日 ロンドン

去る木曜日、5日かかるてこちらに着きました。初日は疲れ、2日目は死んだも同然、3日目はまあまあ、残る4日目と5日目は元気でした。今では疲労を心地よく思っています。いい運動になりましたから。ホイッグの連中はしきりに私に会いたがっていました。溺れかかった時に小枝でもつかむかのように私を迎えてくれました。大官たちは私にぎこちない詫びをいいました。ですが、大蔵卿のゴドルフィンは冷淡でした。私は仕返ししてやろうと思っています…

だれもかれも、どうしてアイルランドに長く住みつくようになったのかと私に訊ねます。まるでロンドン住いが私にとって自然であるみたいに。だが、それはいっても、だれも私をロンドンに落着かせようとはしてくれない。それなら、私は断じてダブリンへ戻るつもりです。ララカーの堀割りはこれまでのなにもまして私には満足ですから……

そろそろ10時です。この手紙をベル・ボーイを通じて出すのは控えます。一週間したらもっと長い手紙を出します。とりあえず、ロンドンに無事着いたことをお知らせします。

1710年10月10日、ロンドン、には次のようなことが書いてある。

変革は私の仕事の妨げになるだろうか。変革がなければ私には全くなにもできないでしょう。今の私には可能なかぎりの希望がすべて備わっています。もっとも、その中の一つとして確かなものはありませんが……政界の新しい連中と私がどんなふうにやっているか、この手紙でも、このまえの手紙でもすで

にお話ししました。古い連中との時よりも10倍まして、40倍大事にされています。

なお、この書簡集では下記のごとき略字が頻繁に用いられているのが特徴的である。

MD: My Dears で、ステラとレベッカ・ディングレー。

D or DD: Dingley or Dear Dingley.

Ppt: Poppet or Poor Pretty Thing でステラ。

Pdfr or FR: Poor Dear Foolish Rogue or Foolish Rogue でスウィフト。

FW: Farewell.

- (17) Thomas Wharton (1648—1715).
- (18) *A Short Character of His Ex [cellency] T [homas] E [arl of W [harton] L [ord] L [ieutenant] of I [reland]* (1710) でスウィフトはこういう調子でウオルトンをやりこめている。
- (19) Gaius Verres (d. 43 B. C.)
- (20) *the Whig Examiner*.
- (21) *The Conduct of the Allies, and of the Late Ministry, in Beginning and Carrying on the Present War* (1711) が正式の名称。
- (22) *Some Advice to The October Club* (1712).
- (23) *A Letter to A Whig Lord* (1712).
- (24) *The History of The Four Last Years of the Queen* (1712 / 3).
- (25) ここでいう同盟国とはオランダである。政治上の同盟国としてよりも通商上の敵対国としての関係のほうが長く、イギリスにとっては、正面の敵であるフランス以上に不気味な存在だった。
- (26) The pamphlet makes a world of noise, and will do a great deal of good.

### 主要参考文献

Harold Williams, ed., *The Poems of Jonathan Swift* (Oxford, 1966).

Irvin Ehrenpreis, *Swift* (Methuen, 1983).

John Forster, *The Life of Jonathan Swift* (Folcroft, 1972).

Herbert Davis, ed., *The Prose Writings of Jonathan Swift* (Oxford, 1969).

Temple Scott, ed., *The Prose Works of Jonathan Swift, D. D.* (London, 1908).

Harold Williams, ed., *The Correspondence of Jonathan Swift* (Oxford, 1972).